【1】

（遅い。）

（とてつもなく遅い。）

小入野は手を組んで、無い足でお父さん座りをする。

小入野はそのころ、プンスカ怒っていた。

何故かって？

それは彼の血の繋がっていないおじさん、通称大野が全く帰ってこないのだ。

本当は今頃、仕事から帰ってきて、小入野のためにご飯を作ってくれるはずなのだが……。

彼の料理は格別美味しい。特にカレーライスなんかは天に昇りそうなぐらい美味しい。彼の作るカレーライスは小入野の大好物だ。

一口食べれば、口いっぱいにスパイスのいい香りがして、ジャガイモやニンジンが口の中でとろりと融ける。この美味しさはどんな一流シェフでも適わないだろう。また、小入野が大野に出会った時に、初めて作ってくれた料理でもある。

あぁお腹が空いた。死にそうなぐらいお腹が空いた。いやもう死んでるのか。

小入野はグウとお腹を鳴らした。カレーライスのことを考えたらさらにお腹が空いた。早く何か食べ物をくれとお腹が悲鳴を上げる。

死んでもなお、お腹は空く。大抵の幽霊は墓場や仏壇にお供えされたお菓子や果物でお腹を満たす。

だが、小入野に墓なんてない。あったとしても、そもそも場所が分からない。
仕方ない。
冷蔵庫にあるものを適当に取り出して勝手に食べよう。
小入野は冷蔵庫をガチャっと開ける。そしてすぐに「うわっ」と声を上げる。
豆腐一丁と、牛乳一本。
冷蔵庫の中はかわいそうなぐらい空っぽだった。例えるなら今の小入野のお腹の中だ。もしくは今の小入野の頭の中だ。
確か僕の友達の熊川君が『冷蔵庫の中身は、普段の生活を映し出すんだよ。』とか言っていたのを思い出す。
（僕たちの生活はこんなに貧しいのか。）
小入野は、大きく、長く、息を吐く。
ゆっくりと冷蔵庫を閉じる。
しばらく冷蔵庫の前で俯く。
仕方ない。
こうなったら、おじさんを探しに行こう。
早く見つけ出して、たっくさん、美味しいものを作ってもらうんだ。
小入野は無い足で外へと駆け出した。

【2】

〜商店街〜

住宅街には誰もいなくて、しばらくきょろきょろして歩いていると、小入野の前に大きなアーチが立ちふさがった。

「しも、の、がみ、しょうてんがい……。」

『下野上商店街』

アーチに書かれた漢字は、前に、大野おじさんに教えてもらったから分かった。

小入野はアーチをくぐり、商店街の中を進む。

シャッターの閉まった商店街は少し寂しい雰囲気を漂わせていた。

小入野にはそれは、居心地の良い場所のように感じられた。

お盆に集まった人たちが帰った後の実家のような、懐かしさや安心感がある。この商店街もそんな感じだ。

ここにもおじさんはいなかった。

はぁ……。お腹減った……。

早く見つけよう。

早くご飯を作ってもらうために。

〜桜の咲く広い通り〜

商店街を抜けると広い通りに出た。

桜が、道に沿って、一列に、道の始めから、道の終わりまで、たっくさん咲いている。

満開だ。

一度だけ、おじさんと一緒にこの桜を見に来たことがある。でもそのときはつぼみが多かった。ちょっとだけ残念だったのを覚えている。

でも今は、つぼみなんて無いぐらいに満開だった。

一定の間隔で置かれたオシャレな電燈が、満開の桜を綺麗に映し出した。

綺麗だな……。おじさんと一緒に見たいなぁ……。

おじさんが桜と並んだら、綺麗な顔がさらに際立つんだろうな……。

そんなことを考えながら桜の間をゆっくりと歩く。

こう、美しい風景を見ていると、おじさんと出会ったときを、走馬灯が流れるように思い出すなぁ。

走馬灯の使い方合ってるかなぁ？

僕たちは去年の今頃に、出会ったんだよね。夜中、僕がボーっと夫沢踏切に立ってたら、どうやら電車がこっちに向かってきてたらしくて、まぁどうせ死んでるしと思って放って置いたら、急にガシッて体を持ち上げられて、気づけば踏切を飛び越えてた。

「何やってるんだ君は！」

急に怒鳴られたと思ったら、目の前にはかっこいいおじさん。この人が大野おじさんだったんだけど、そのときのおじさんの顔といったら、焦りとか疲れとかで面白い表情してたなぁ。そのあと、僕が幽霊だって気づいたときの驚いた顔も傑作だったなぁ。

そんなおじさんが気に入って、僕は憑りついたわけなんだよね。

憑りついて正解だったよ。おじさんの料理はお化けも受け付ける美味しい料理だったからね。

あーあ。また料理のこと考えちゃった。

お腹空いたなぁ……。

早くおじさんを見つけないと。

小入野はまた無い足で駆け出した。

【3】

〜大川原公園〜

しばらく走ると、真っ暗な公園の前にたどり着いた。ところどころ付いている電灯が、公園を白く照らしている。その光の周りには小さい蛾が数匹飛んでいた。

誰もいない寂しい公園の中から、若い男の人たちの笑い声が聞こえた。笑い声って言っても普通の笑い声じゃない。悪い笑い声、アニメのいじめっ子とかがよくする、人を馬鹿にするような笑い声だった。

まさか……

小入野は公園の中へと恐る恐る入っていった。

＊

その声は公衆トイレの白い四角い建物の裏から聞こえてきていた。

小入野は、こっそりと声のする方を覗き込む。

そこは、電灯で照らしだされていて、いかにもヤンキーみたいな男の人三人が、誰かを囲んで、殴ったり、蹴ったり、していた。

その誰かは

大野おじさんだった。

おじさんは、今まで見たことのない表情をしていた。あんなに苦しそうな表情、初めて見た。

綺麗な顔はあざまみれで、整ったスーツはぐしゃぐしゃになって汚れていた。

殴られたり、蹴られたりする度に、おじさんはかわいそうな子犬みたいな声を出して、うずくまった。

（やめて。おじさんをいじめないで。おじさんが何をしたの。）

奴らの笑い声が、小入野の耳に憎らしく響いた。それと共に大野の痛々しい声も頭にこだました。

（やめて。やめてよ。かわいそうだよ。ひどいよ。ひどい。何であいつら笑ってるの。何が面白いの。

苦しんでるのを見て何が楽しいの。ひどい。ひどい。あいつら嫌い。死んじゃえばいいのに。おじさんの倍以上苦しんで死んじゃえ。いっそ今殺してやろうか。一思いに呪い殺してやろうか。憎い。憎い。憎い。奴らが憎い。）

小入野の心の中に何か黒いものが沢山溜まって、今にも破裂しそうだ。

そのとき、大野はふらふらな足で立ち上がろうと、四つん這いになった。その腕はぶるぶると震えていた。小入野はそんな大野を見て胸が苦しくなった。「おじさん！」と叫ぼうとしたとき、鈍い音が聞こえた。次に聞こえたのは、バタッという音。

大野は頭から血を流して倒れていた。

三人が靴先で大野の体を揺するが、ピクリとも動かなかった。

（死んじゃったの？気絶しちゃったの？）

その瞬間、小入野の中でプチっと何かがはじけた。

「あれれ。もう終わりかよ。」

三人の中のリーダー的な金髪の男が倒れた大野を見て嘲笑った。

もう二人の男は背後から視線を感じたようで、後ろを振り返ってきょろきょろしていた。

するとその中の一人があることに気が付いた。

「兄貴。あそこにガキがいますよ……。」

「あ?どこだ?」
その男の指さした方向を見てみると、そこには、公衆トイレの陰から、真っ赤な目を光らせて、こちらをじーっと見つめる、不気味な男の子の姿があった。
(何だ……?不気味なやつだな……。あいつ、大野の知り合いか何かなのか?)そう思い、金髪の男はその子に、がなり声で話しかける。
「何してんだ。コソコソしてねぇで出てこいよ。」
その男の子は、ゆっくりと滑るように出てきた。光に当たっていないので、姿全部はハッキリとは見えなかったが、真っ白な顔と、真っ赤な目が、ぼんやりと闇に浮かび上がっているのは見えた。その顔は口をパクパクとさせ、何か声を発している。その時に見える真っ黒な口の中は、穴がどこまでも続いているようで、より一層彼を不気味に見せた。
「……な。」
ボソッと何かを言う男の子。男三人の耳には聞き取れなかった。
「何言ってんだ?」
「……さ……わ……な。」
もう一度聞き返すも、やはり聞こえない。金髪の男はそれにイラつき声を上げる。
「何言ってんだよ!?聞こえねぇぞ!」
すると

「大野おじさんにさわるな！！」
その男の子は大きく目をむき、噛みつきそうな勢いで口を開けた。
金髪の男はその様子に少しうろたえるが、すぐ体勢を持ち直し見下すような目で話しかける。
「誰だおめぇ。こいつの知り合いかぁ？」
「僕は小入野。大野おじさんは僕のおじさんだ！傷つけるなんて許せない！！」
大野は小入野のおじさんらしい。男は質問した割には「フーン」と興味なさげに反応した。
「オマエのおじさんはなぁ。大学でバケモンだって言われてたんだぜ。知ってたか？幽霊が見えるからって。バケモンだから傷つけても大丈夫だろ？」
金髪の男は大野の髪を掴んで頭をグラグラと揺らす。
その瞬間、変な波動みたいなものが、男三人を吹き飛ばした。
突然だった。
その波動は小入野から発せられたものだった。
金髪の男以外の他の二人は、それに驚きゴキブリのように逃げて行った。
金髪の男の「待て」という叫び声に耳も傾けずに。
一人残された男は、どういうわけか、宙にぶらぶらと浮いていた。そして息苦しい。上に引っ張られているのでは無い。誰かに首を掴みあげられているように男は感じた。
「何だよこれ！？オマエ何もんだ！？」

男の言葉に答えるように、小入野はゆっくりと光の当たる方へと出てきた。
徐々にその姿が見えてくる。
小入野が光の下に来た瞬間、金髪の男は「ひっ！！」と声を上げる。
その子には、下半身が無かった。
あまりにも衝撃的で、口をパクパクさせる男。
「ねぇ、びっくりした？僕、幽霊なんだよ。でもそんじょそこらの幽霊とは違うんだ。誰の目でも見える幽霊さ。」
「あ……あ……あぁ？」
「それに、僕。『不思議な力』を持ってるんだ。いつもはおじさんに使っちゃダメだって約束してあるけど、今は、関係ないよね？」
どうやら男を持ち上げているのは、彼の言うその「不思議な力」らしい。
「不思議な力」で小入野は離れた場所でも、金髪の男の首をつかめる。
この力は生きている人間に使うと危険だと知っているが、今の小入野にはそんなの関係ない。悪い人に使うんだったら、構わないと思ったのだ。
小入野は「ふふふっ」と怪しく笑う。その目には怯える男の姿。その男は、ビシッと小入野を指さして叫ぶように言った。
「オマエら二人とも、化け物だ！！！」

その言葉に怒りを覚えた小入野は手にギリギリと力を込めた。
「うぐっ、ぐぐぅ」
変な音が聞こえた。
見てみると、男の首が小入野の手を握るのと同時にキュッとしまっていた。男の苦しそうな声が聞こえた。
だが、小入野は男の首を放すことはなかった。
「僕らは化け物なんかじゃない……。人の苦しんでいるのを見て笑ってるオマエらの方が、よっぽど化け物だ！！」
小入野が首の締めを強くしようとしたとき、ある声が小入野の動きを止めた。
「小入野やめろ！！」
その声の主は大野だった。大野は気絶していただけだったようだ。
大野は怖い顔で小入野を睨んでいた。
「小入野、放すんだ。」
小入野は少し戸惑いながらも、苦しそうな男の顔を恨めしく見つめてから無造作に男を落とした。
地面に叩きつけられた男は、ゲホゲホとむせ、何も言わずにおびえた顔で公園から去っていった。
公園に小入野と大野だけが残された。
辺りがしーんと静まり返った。

（約束破ったところ見られちゃった……）
大野との約束を破ったことで、小入野は大野の目を見ることができずに、その場でもじもじする。
大野は、服の汚れを手ではたきながら静かに立ち上がった。
大野は小入野にゆっくり近づく。
小入野は怒られると思って、目をぎゅっとつぶった。
しかし、そんなことなかった。大野は小入野の頭にポンと手を置いて優しく話しかけた。
「さ、帰ろうか。」
小入野は決まりが悪そうにこくりと頷いた。

【4】

～また、桜の咲く広い通り～
綺麗な桜に挟まれた広い道に、大野と小入野は並んで歩いていた。
（おじさん、まだ怒ってるかな……）
小入野は大野の顔をちらちらと見る。
大野は頭についた血をハンカチでぬぐっていた。
すると、大野は小入野の視線に気づいたようで、「どうした?」と声をかけた。
小入野は慌てて目をそらし、「ううん、なんでもない。」と静かに答える。

大野は納得いかないような顔で「そっか。」と言う。
「さっきは助けてくれてありがとな。あいつら大学が一緒だったんだけど、そんときからああいう感じでさ、人って変わんないんだな～。」
場の雰囲気を良くしようと話題を持ちかける大野だが、小入野は「はは……。」と俯いて笑うだけで、全く会話が弾まなかった。
「まだ、約束のこと、気にしてるのか？」
今度は約束のことを持ちかけた。すると小入野は小さくうなずいた。
「確かにまぁ……約束は破ってたけど、別にその『不思議な力』を悪用してたわけじゃないし、何てったって、俺を助けてくれたじゃないか、小入野は。気にするなって。むしろ感謝してるぞ？」
大野は笑顔で言った。しかし小入野はまだ浮かない顔をしていた。すると、ずっと黙り込んでいた小入野がやっと口を開いた。
「でも、あのとき怒った顔してたよ？」
「うーん。確かに怒った顔はしたなぁ。けど怒ってたのは約束を破ったからじゃなくて、その力で人を傷つけたからなんだよ。」
「どういうこと？」
大野は少し考えてから、また話し始めた。
「約束を破ることなんてよくあることだよ。でも人は絶対傷つけちゃいけない。『不思議な力』があっ

ても無くてもだ。これ、その約束より大事なこと。」
大野は人差し指を立ててそう言った。だが小入野は納得しない。
「でもあいつらも大野おじさんを傷つけたよ？」
「じゃあ、小入野はあいつらみたいになりたいのか？」
大野が少し強い口調できいた。
「ううん……。」
小入野はまた俯く。
「小入野にはああいう人たちになって欲しくないんだ。なぁ小入野。人を傷つける人にならないって、誓えるか？これは約束みたいに破っちゃ駄目だぞ。これは誓いだからな？」
大野は小入野の目をじっと見つめる。
「……うん。分かった……！」
小入野は少し元気よく答えた。
すると大野は「良い子だ。」と小入野の頭を撫でてくれた。
小入野はちょっぴり嬉しくなった。
大野はいつもの優しい口調に戻って質問してきた。
「そういえば晩御飯、何がいい？まだ決めてなかったや。」
「カレーライスがいい。」

小入野は即答した。
大野は思ったより早く返答されたので目を丸くした。でもすぐに「分かった。」とＯＫをくれた。
「でも、今、食料が無いんだったな。こっから近いスーパーとか無いし、どうしようか……。」
小入野は冷蔵庫の中身を思い出してクスクスと笑った。
すると大野がポンと手を叩く。
「そうだ。こっから野上の家近いし、野上たちから色々恵んでもらうか。」
「うん。いいよ。」
二人は野上の家を目指しスタスタと歩く。
しかし、こうして見るとおじさんって綺麗だ。桜と並ぶとさらに綺麗だ。
こんなに優しくて綺麗なおじさんを持っているのは僕だけだろうな……。
「おじさん、手、つないで良い？」
自分でもよく分からない。勝手に口から出てたんだ。
（え、僕何言ってんの？おじさん、不思議そうに見てるよ！？ああ、どうしよ！！）
すると、大野はすんなり手をつないでくれた。
「え……！？」
「ん？手つなぐんだろ？」
「あ、う、うん。」

恥ずかしいけどまあ良いか。おじさんの手って温かいな……。

小入野は何だか幸せな気持ちになった。

今日の晩御飯はきっと美味しいだろうな。

まあ、野上ちゃんたちが食材をくれたらの話だけどね。